

当事者の怒りを受け止めてほしい —あすなろ福祉会でのことの経緯とピープルファーストの行動

ふくおか あぐる しゃかいふくしほうじん そうしえん
福岡 拳 (社会福祉法人 創思苑)

ほっかいどう えさしちょう ちゅうしん
北海道・江差町を中心にグループホームを運営する社会福祉法人あすなろ福祉会が、入居を希望するカップルに不妊処置を求めていたことが昨年12月に明らかになりました。

この事案についての日本グループホーム学会としての考えは、季刊グループホームの前号(Vol.76)やホームページに掲載された声明文の通りです。あすなろ福祉会が行っていたことは権利侵害であり、また一方で、一般人だけで抱え込む問題ではなく、障害のある人が地域のなかで結婚や子育てが実現できるような仕組みづくりの必要性を訴えています。再度ご一読いただければと思います。

ここでは、あすなろ福祉会でのことが明らかになった後、知的障害のある人たちの当事者団体「ピープルファースト」の人たちがどう考え、行動したのかを支援者の立場から書いていきたいと思います。

あすなろ福祉会について

はじめに、あすなろ福祉会の情報を共有しておきます。なぜこのようなことが起きたのかを知るには、地域性を理解することが今回においてはとても重要になると考えるからです。以下はホームページ等で公表されている情報です。

社会福祉法人江差福祉会として1989年に設立されます(2021年に「社会福祉法人あすなろ福祉会」に名称変更)。定員40名の入所施

せつ設「あすなろ学園」からスタートし、それからの30年間で大きく事業を広げていきます。日中活動の事業所とともに、グループホームも多く運営するようになります。2022年4月現在でグループホームは33棟・定員326名。他に認知症対応のグループホームも複数運営されています。

一方で、江差町で療育手帳を持つ人は「江差町障がい福祉計画」によると、2019年で174名です。あすなろ福祉会が運営するグループホームの一部は近隣の知内町にあります。多くの江差町内にあります。利用者のなかで、身体障害・精神障害のみの方がどれだけおられるか分かりませんが、江差町外から多くの知的障害のある人たちが集まっているのだと思われます。

また、独立行政法人福祉医療機構が開設するWAMNETによれば、江差町で障害福祉サービスを提供しているのは、日中活動系・居住系では、あすなろ福祉会が運営する事業所しかありません。グループホームも作業所も、あすなろ福祉会の事業所しかないので。そして、あすなろ福祉会の機関誌において、理事長は「江差町の人口8000人のうち、10%にあたる800人以上があすなろ福祉会の関係者だ」と述べています。それは障害福祉サービスの利用を希望する人にとっては、あすなろ福祉会のサービスを選ぶしかない状況に加え、家族や親戚など多くの知り合いが

あすなろ福祉会と関係しているということになります。そのような地域のなかでは、障害のある人たち・家族が自由に意見を言える環境ではないと考えられます。今のことでは、あすなろ福祉会は「利用者や家族に選んでもらった」と主張していますが、不妊処置についての同意がなければ、カップルはグループホームを利用することができませんでした。利用者や家族が選んだ選択は、果たして本当の思いだったのでしょうか。

山田さんの怒りから始まった

このニュースが報道されたとき、ピープルファースト大阪の当事者の間でも、大きな関心を集めました。ピープルファーストジャパンの役員でもあり、今年10月に開催される全国大会「第28回ピープルファースト大会in大阪」の実行委員長でもある山田浩さんは、報道を知ってすぐにピープルファースト北海道の松岡敏雄会長に電話をしました。「僕は怒っている。なぜこんなことが起きるのか。北海道に行くから一緒に行動しよう。山田さん自身もグループホームで暮らしています。山田さんにとっても、施設の都合で当事者の体が傷つけられていることは到底納得できるものではありませんでした。

その頃、北海道では西興部村の入所施設虐待事件などが相次いで報じられています。松岡さんは地元のピープルファーストとして、どう動けばいいのか迷っていたと言います。それが山田さんからの電話で何をするべきかが決まりました。松岡さんたちは、あすなろ福祉会への抗議行動をするために、札幌はこだてなかまえんしゃこえいじょほうどうをつくりました。そして最初に報道された12月19日から10日もいかない12月28日には、私

おおさかぐみ ふく すーム はな あ おこな
たち大阪組も含めてzoomで話し合いが行われ、年明けに行動することが決まったのです。

ピープルファーストとして行動する

ピープルファーストがこうした行動にすぐ取り組めるには、これまでの積み重ねがあります。ピープルファーストは知的障害のある人たちのセルフアドボカシー運動として、1970年代にアメリカで始まりました。1993年にカナダで開かれた3回目の国際会議には、日本からも多く当事者や支援者が参加します。翌年、日本でも初めてのピープルファースト大会が開かれ、今までその流れは続っています。大会を開催するだけでなく、差別や虐待事件・入所施設の問題にも取り組んできました。近年では、旧優生保護法のもと強制不妊手術を受け、現在、国を相手に裁判している人たちの応援に力を入れています。松岡さんたちも北海道の原告の人たちと交流があることから、障害があることを理由にした不妊手術・処置は自分たちの問題として、何度も話し合ってきました。原告の人たちのつらい、悔しい思いにも触れてきました。それだけにあすなろ福祉会で不妊処置が20年以上も続けられてきたことには怒りしかありませんでした。

とし あ がつ にち おおさか ほつ
年が明けた1月11日。大阪のメンバーと北海道のメンバーが函館空港からほど近い町にある作業所で合流します。総勢30名を超えるなかで、一人一人が行動に参加した気持ちを語りました。その時確認された抗議文のポイントは主に3つです。「障害者が子どもを産みたいと思う時は、共に学び、当事者へわかりやすい情報を提供してください」「手術をしてしまったら一生のことです。そこで暮らしている当事者が後悔する気持ちになったと

きに責任を持てますか」「子育て制度がそろっていないからといって、あきらめないでください。可能性と一緒に考えてほしい」。全文はピープルファーストジャパンのホームページから読むことができます。<https://www.pf-j.jp/>

「自分たちは悪いことはしていない」
翌12日からは江差町で立て続けに抗議行動を行いました。

最初に訪れたあすなろ福祉会本部では、樋口英俊理事長と話し合いの場を持つことができました。1時間に及ぶ話し合いのなかで、樋口理事長が次のように語りました。

「そこ（不妊処置）の決定については、当然本人たちもさることながら、我々はどうするということではなくて、いわゆる親御さん、もしくは保護者、保護者が亡くなってしまえば兄弟、こういう直接の親族、3親等くらいの親族の中で相談願うということが一つのルールなんです」「彼らが子育てとか、我々から起こりえるよねといった時に、なぜ、その道を選ばないのかというと、自分たちの経験の中、障害があるがゆえにいじめられた。同じ思いをさせたくないということが、我々の中に出てくる。そこで、私がこれ（不妊処置）が条件だということではなくて、今の現状では不可能だねということが大半だということです。」

ピープルファーストの当事者たちを前に「知的障害者に子育ては不可能」と平然と語ったことに唖然としました。入所施設「あすなろ学園」の4階で行われた会場では、新聞・テレビなどの多くのマスコミがカメラを向けていました。理事長が雄弁に自信満々に語るその姿は、当事者に向かられたものでは

なく、カメラを意識したのかもしれません。「問題があるかのように報道されているけれど、現状では不可能なことだ。自分たちは悪いことはしていない」と強くアピールしているように見えました。

「僕らは人間や。結婚もするし、子どももつくる」

そんな理事長に対して、ピープルファーストの当事者からは、次々と自分たちの思いが向けられます。

「障害があるから産んではダメなのか。好きな人の子どもを産んだらいけないのか。私たちは、自分で選んで障害者になったわけではないです。誰と住むのも本人が決めるただし、子どもを産むのも本人が決めることだし、やっぱり親とか周りの親戚ではなくて」「当事者の自己選択、自己決定はいかなる場合でも尊重してください」「僕らは知的障害者やけど、僕らは人間や。結婚もするし、子どももつくる、自由じゃないですか。それを産ませないというのは絶対おかしい。そういうことを見るふりしなくて、ちゃんと見ながら検討しなければいけない」。

しかし、理事長の返事は変わりません。「彼らと向かい合ってやりとりも十二分に時間を開けているという気持ちですけど、それを実際の中身の部分では、客観的に難しいという部分が、地域の環境がかなり影響するというご承知おきしていただきたい」。

話し合いは、平行線のまま終わりました。あすなろ福祉会はこれからも知的障害のある人たちの子育てを否定し続けるのでしょうか。残念なことに、あすなろ福祉会と同じようく考えている人たちが少なくないことが明らかになっています。この問題が報道され、

インターネット上ではさまざまな意見が出されました。あすなろ福祉会を擁護する人たちが多くいました。今回、先駆けて報道した全国通信は、その後、全国の知的障害者の関係者にアンケートを取っています。家族・親族・支援者から集まった回答は585件。結婚に賛成は58%、反対は42%。子どもを持つことについては賛成41%、反対58%と反対が上回ります。また、2022年に日本社会福祉学会第70回秋季大会で発表された「知的障害者の性的表現・行動に対する支援者の意識調査—知的障害者の出産・育児に焦点をあてて—筑波大学人間系」では、全国の知的障害に関係する事業所からおよそ1200名の支援者の回答を得ました。9割の支援者が結婚について容認している一方、出産・子育ては思い留まらせるべきと考えるものが2~3割、子どもを健全に育てることができないと考えるものは3~4割にのぼっていました。

「子育ての権利を制限する考えは、知的障害のある人たちの人間性をも否定している」

知的障害のある人たちの子育てに理解がされないなか、悲劇も起きています。2021年に千葉県四街道市のグループホームで、知的障害のある女性がトイレで出産、2階窓から胎児を投げ落とし亡くなる事件がありました。そして、あすなろ福祉会でも同様の事件が2020年3月に起きています。あすなろ福祉会のグループホームで暮らす知的障害のある女性が職員と交際。女性は妊娠しましたが、誰にも知らせることなく、誰にも気付かれてことなく、あすなろ福祉会の日中活動事業所のトイレで出産し、そのまま便器に押し込み、子どもを死なせてしまいました。女性はその後、執行猶予付きの有罪判決を受け、今もな

お、あすなろ福祉会のグループホームで暮らしていると言います。もし、結婚や子育てに理解がある法人であったなら、支援者がそうした教育や研修を受けていたなら、同じことは起きたでしょうか。理事長や法人は、この事件をどう受け止めているのか。社会や制度、環境の問題ではなく、自分たちの支援に問題があったと認めるべきです。子育ての権利を制限する考えは、知的障害のある人たちの間性をも否定していると考えます。

ピープルファーストの人たちは、その後、江差町役場で担当者と話し合い、翌日には北海道庁で担当者と話をします。しかし役所から返ってくる言葉は「検討中」「調査中」という回答しかありませんでした。行政として、知的障害のある人たちの結婚や子育てがどうあるべきか、あすなろ福祉会がしてきたことに対する見解は語られませんでした。抗議行動をしてきた当事者・支援者に社会の無理解が突きつけられるなか、ピープルファースト北海道で長年代表を務めた土本秋夫さんが道庁の担当者を前に、怒りを叫び続けます。20分にわたるその叫びには、障害があるというだけで差別を受け続けるこの国への怒りが込められていました。不妊手術を受けさせられること、入所施設に入れられたまま亡くなっていくこと、そして津久井やまゆり園で19人が殺されたこと。

今回の行動は、パンジーメディアのインターネット放送局「きぼうのつばさ」第77回放送で詳しくお伝えしています。当事者の怒りが詰まったこの映像を見て、多くの人にたくさんのことを感じてほしいと思っています。

<https://pansymedia.com/broadcaster/77.html>